

上代に於ける讃備地方の地位

寺 田 貞 次

皇紀二千六百年を迎へ得たことは吾人の最光榮とする所で、國民として今更ながら當時を追想し、殊に郷里の者としては其の地の古を偲び、祖先に謝し、現在を悦び、將來に資することは最も必要なことと思ふのである、夫につけても我が讃岐附近の地が我が國に對し、古來如何なる役割を演じた所であるかを熟々感じたので、この記念すべき論文集發行に當り、聊か追懷共に認識を深くしたいと思ふ次第である。

我が讃岐の地は對岸岡山邊の地と共に、我が國にとつては古來最重要な位置を占めてゐた所であり、郷里たる吾人の最よく認識しなければならぬ所である。吉備高島聖蹟顯彰會發行の高島村誌にも岡山附近の地の重要性を論じて、「上古の吉備史を按する時、我が高島村を中心として、此の地方が全國第一の文化發展の地として、我が光輝ある帝國進展の根柢をなせるの地たるを思ふ時、感興禁する能はざるものあり」（頁一）と稱してゐる。かく我が郷土の地が一般には考へられてゐない程、我が國にとつて重要性を有してゐた土地であるのは何故であるか、是は全く地構上の關係から起つてゐるので、全く地理的原因に依るものと云ふことを看過しては

ならないのである。

地質學者の研究によれば、我が郷里の地は瀬戸内海的地溝帶と、之に縦横の斷層作用が加つて自然の交通路を生じた所である。即ち我が日本列島は亞細亞の東縁を飾る所謂花彩列島で、凸面を太平洋に向けて彎曲して居るのであるが、其の中央に山脉に沿ふて地溝が出来てゐる、其の原因に就ては色々の説があるが、多くは我が列島は南北二彎より成つて居る關係上生じたものと考へ、殊に南彎の方即ち我が郷土の地方は、地帶構造上内外二帶に分れて居ることが比較的よく見られる所であるので、これを論據としてゐるのが多い、有名な獨逸の地理學者リヒトホーヘンの如きはこの内帶を以て支那の崑崙山系の北派、即ち秦嶺山脉の延長であり、外帶は南派即ち支那山系(南嶺)の延長であるとし、この兩帶の結合によつて破砕帶を生じこゝに内外二帶が分れたのであると考へて居り、我が國の地質學者故原田豊吉博士の如きは、九州の八代より佐賀關半島の北を通り、伊豫の松山に至り、更に東して讃岐山脉の北側を通り、近畿地方をへて、信濃の諏訪盆地に至る地體構造線を以て、内外を分つ線と申してゐるのである、この地溝帶が即ち我が瀬戸内海をなしてゐるわけである。

而この内外地帶の山脉は最初は高い山嶽を形成してゐたのであるが、多年の星霜を経て所謂準平原(Peneplain)と成り、更に風水の浸蝕を受けて複雑な地形を形成するやうになつたのである、然し準平原の性として現今の起伏を見ると、何れも其の高さは畧一定してゐる、新しく噴出した大山(伯耆)並に、石見の三瓶山等を除いたならば、中國の山々は大體に於て千五百尺内外の高さのものゝみで、頂上は畧齊一した緩斜面の丘陵をなしてゐるの

である、これに後になつて罅裂が出来、これが畧々放射狀に生じた、この罅裂は中國より四國を通じて發生してゐるので、大阪から室戸崎方面に走れる大阪室戸線、讃岐の引田から土佐の野市に通する引田野市線、其の他、王生川八幡濱線、廣島別府線、濱田大牟田線は、即ちこの斷層作用で出来た罅裂線であり(香川縣地誌、上卷頁八二)、河川がこの線に沿ふて發達し、これが爲、恰も帶の如き狭長い溪谷が穿たれ、深く内陸に入込んでゐるのである。中國地方の地形はかくの如くであるから、この地方では多少の迂廻を覺悟さへすれば、殆ど山坡を越える難はなくして、彼我往來することが出来るのである。(小西和著瀬戸内海論、中國の山河頁二四八)

かく我が郷土の地は、瀬戸内海の陥落地帯と、之に畧縦に走る斷層線とによつて、自然の交通路を生じたのであるが、然も其の縦横の兩交通線が我が郷土附近に於て交叉してゐるのである。即ち瀬戸内海の東西の交通線、即ち下關方面から大阪に通する線と、岡山縣の旭川又は高梁川と出雲の日野川又は斐伊川(鏡川)を結ぶ線と、瀬戸内海から紀淡海峡に通する南北線とによつて造られてゐるのである。この縦横の兩交通線のあつたことは、我が郷土をして、我が國に於ける重要な位置を備えしむるに至つた重大原因と考へられるのである。

この交通線は意外にも文化上より觀察する時、恰も我が國文化發祥地の如き役割を有してゐるのである。我が國唯一の古典たる古事記、日本書紀を繙く時、其の記事が殆ど我が郷土の地名を以て充滿されてゐるのに驚かされるのである、即ち古事記で最初に我が郷土地方の名稱があらはれてゐるのは「故二柱神立天浮橋而……生子水蛭子、此子者入葦船而、流去、次生淡嶋、是亦不入子之例」であり、之に次で、「生子淡道之穗之狹別島、次生

伊豫之三名島、此島者身一而、有面四、每面有名故伊豫國謂愛比賣、讃岐國謂飯依比古、粟國謂大宜都比賣、土左國謂建依別、次生隱伎之三子島……『後還坐之時、生吉備兒島亦名謂建日方別、次生小豆島、亦名謂大野手比賣、次生大島亦名謂大多麻流別、次生女島、亦名謂天一根、次生知訶島、亦名謂天之忍男、次生兩兒島、亦名謂天兩屋（自吉備兒島至天兩屋併六島）既生國竟生神……』などが其の著しい所である。

然しこれを地構上から考へる時、この記事は決して偶然ではないと考へられるのであり、寧意外に意義深きを覺り得るのである。即ち横の交通線たる瀬戸内海が我が祖先活動の搖籃であつたことは理の當然であり、從て又縦の交通線が當時より既に利用されてゐたことも察することが出来るのであるからして、古典に於ける開闢の物語が共に我が郷土を舞臺として營まれてゐることも決して不思議ではないと考へられる。

畏いことではあるが、述ぶることを許されるならば、自分は古典にある伊弉諾、伊弉冉兩尊の物語の如きは、余の所謂南北線に對する往來を示すものと考へられ、之を具體的に申すならば、紀伊方面と出雲方面との往來を示すものではないかと考へるのである。古事記に伊弉冉尊のおかくれになつた時の記事がある『故伊邪那美神者因生火神、遂神避坐也（唯意能恭呂島者非所生、亦）（蛭子與淡島不入子之例也）故其所神避之伊邪那美神者、葬出雲國與伯伎國堺比婆之山也』と記され、出雲と伯耆の堺の邊に御陵が營まれたやうに察せられ、一層この感を深くするのであり、この他南北線による當時の交通状態は古事記の所々に見受けることが出来る、例へば伊弉諾尊の出雲に御越になつた記事として、

「故其所謂黃泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也、於是欲相見其妹伊邪那美、追往黃泉國、爾自殿騰戸出向之時、伊邪那伎命、諸詔之、愛我那邇妹命、吾與汝所作之國未作竟、故可還、伊邪那美命、答曰悔哉、不速來……」

があり、又素盞鳴尊の傳に

「故所避追而、降出雲國之肥上河上在鳥髮地、此時箸從其河流下、於是須佐之男命、以爲人有其河上而、尋覓上往者、老夫與老女二人在而童女置中而泣」

の記事があり、何れも古い時代に於て瀬戸内海を中心として、我が郷土地方に於て南北の往來が盛に行はれたことを物語るものである。尙後になつてもかゝる例は各時代を通じて之を觀ることが出來、大國主神についても次の如き記事を發見する。「汝有此間者、遂爲八十神所滅、乃速遣於木國之大屋毘古神之御所、爾八十神覓追臻、而矢刺之時、自木保遍逃而去、御祖命生子云、可參向須佐能男命所坐之根堅洲國、必其大神議也、故隨詔命、而參到須佐之男命之御所者、其女須勢理毘賣出見……」「神武天皇」頁八九には、大國主命のことを記して、「依て母神は命を紀伊國なる大屋毘古神の御許に逃がして遣られたが、そこにも八十神が追て來たので、更に須佐之男命の御許に遣り給ふたと云ふてゐる、此等も出雲と木國との間の往來を物語るものと申すことが出来る、」と云ひ、又沼田頼輔著「上代の吉備」頁三には「神武天皇御東遷の時、天皇が久しく驛を高島の行宮に駐めさせ給ひしも、恐くは出雲民族牽制のためにして、畧この消息を窺ふに足る」と云はれ、この時代に於ても尙吉備を通じて

山陰との往來線の重要であつたことを察せしめるものである。尙時代は下るが吉備津彦命の吉備に御下りになつた理由も、矢張りこの道による交通關係を思ひ出さしめるのである、同「上代の吉備」頁五には、「吉備津彦命が吉備に入られし後の事情については正史にこれを見ざれば知り難きも、盖出雲民族鎮撫の爲なることは疑なかるべし」と云ひ、この道の往來を物語てゐるのである。尙吉備津彦命以後に於ても往來のあつたことは現今この道に沿ふて、往來を示す遺蹟が残つてゐるによつても察することが出来る。再「上代の吉備」を讀むと、次のやうな記事がある。(頁八)

「伯耆の日野郡宮内村に樂々福神社あり、吉備津彦命を祀る、又伯耆に西伯郡所子村にも又宮内といへる所あり、吉備津彦命を祀る、又高梁川の流域にも今も吉備津彦命に關する口碑を傳ふるものあり、中にも阿哲郡新見村には吉備津彦命の墳墓とさへ傳ふるものあり」とて其の著者は之を解釋して「かく伯耆の國民に吉備津彦命を祖神と仰ぐものあるは、思ふに吉備の國民の高梁川の流域に沿ひ、次第に北部に向て發展し、遂に中國脊梁の分水嶺を越えて、始めて日野川の水源に會し、更に其流域に沿ふて北方に植民したるものなるべし」と云ふてゐる。

尙高梁川の南北線により近畿と出雲地方との交通を説いたものゝ一つを挙げると、菟田茂丸著の「樞原の遠祖」頁七一には、熊野と出雲との關係を記して「熊野とは古へは、紀伊國南北牟婁郡海陸一帯に亘る廣い區域の古名であります、此の地は天照大神の御弟素戔鳴尊が神代に根國であつた、山陰地方からしばしば往來せられた、我

國古代文化の三大地方の一であります」と云ひ、又、日本書紀にある「狹野を越えて熊野の神邑に到る」を解して、「神武天皇が山道を越え、熊野詣でを遊ばされたことを申しますので、大御船のみが熊野川の河口である今の新宮の地に御待ち申し上げたものと信するのであります、さて熊野の神邑とはどこであるかと申しますと、それは今の熊野本宮の地であります、此熊野は天皇御東征以前からあらはれてゐた古い土地で、神代に素戔鳴尊がこゝを本據として山陰地方に往來せられた古代文化の地でありますから、天皇が此の神邑に特に御出でになつたものと存するのであります、出雲にも熊野の地名がありますが、やまとに近接してゐる地勢上、紀州の熊野の地名が出雲の地名に移つたものと思はれます。」と、

かゝる例證は各書に於て觀ることの出来る所で、高梁川の斷層線により、南北往來の盛であつたことは、充分に知ることが出来ると思ふ。

尚瀬戸内海の東西の往來の如きは、素より盛であつたものであるが、古事記に傳ふる例を今一つ擧げるならば、自分は前述の伊弉諾、伊弉冉兩尊の國土御修理固成の段を拜察しようと思ふ。

最初に子水蛭子を、次で淡島を、次で淡道之徳之狹別島を生み給ふたが、此等は御子の數には御入になつてゐない、次に伊豫の二名島を御生になつた、此島は身一つで面四つありと申し、讃岐・阿波・土佐を指すもので、即ち四國の事であり、次に隱岐の三子島を御生になり、かくて大八島を御生になり、御還りに吉備兒島を始め、小豆島、大島、女島、知訶島、兩兒島を御生になつたと云ふ順序になつて居り、御生になつたと云ふ意味を修理

間成遊ばされたと云ふ意に考へるならば、この物語は尊の御往來になつた御道筋を申すものと解することが出来、尊が瀬戸内海の東西の交通線により、淡路の方面から四國、九州と大八洲を御めぐりになり、御歸りに吉備から小豆島を始め、其の附近の島々を御めぐりになつたものと拜察することが出来るやうな氣に打たれる。かく考へる時、隱岐が少し先に記されてゐるのは不審であるが、これは又高梁川の南北線によつて山陰方面と御往來遊ばした結果とも考へられないこともなく、最後に吉備・兒島・小豆島などが出てゐるのは、御歸途に、矢張り高梁川の交通線によつて、吉備に御もどりになり、夫から兒島並に其の前面に横はる諸島、即ち今の備讃瀬戸に散在する島々を御めぐりになつたと見ることも出来るのであり、此等も結局は瀬戸内海を中心とした東西、南北兩交通の状態をあらはすものゝ如くに考へられるのである。

尙瀬戸内海の東西の往來については、古事記では伊弉諾尊の御往來が氣に付くのである、即ち尊がさきに神遊ました伊弉冉尊に御歸りを御望になり、出雲に御越になり、御陵に御參りになつた物語があり、尊は伊弉冉尊のかはり給へる御姿を眼のあたり御覧になり、逃れて御歸りになる物語がある、其の時の記事は、

「穢國而在祁理、故吾者爲御身之禊而、到坐坐繫日向之橋小門之阿波岐原而禊被也、」

で定めて出雲から吉備をへて内海に御出ましになり、内海を経て日向に御越しになつたことゝ拜察される。又素盞鳴尊（建速須佐之男命）が海原を治すやうに御定まりになつた時に（古事記）其の方には行かれずして御母の國に參り度旨を以て御泣哭になつてゐた、そこで當時淡海の多賀にましました伊邪那岐大神は之を聞しめし、大に御念

になり「然者汝不可住此國、乃神夜良比爾夜良比賜也」と云ふことになつたので、尊は高天原の御姉天照大神の所に御暇乞に御越になり、遂に御母の所即ち出雲の方に御下りになり、肥川上(簸川上)の物語となるのである。此等も何となく尊が瀬戸内海を御通になつて西方に御越になり、更に内海の道をかへし、高梁川の線によつて肥川上に御出ましになつたと云ふ交通路を彷彿たらしめるのであり、神武天皇の日向から瀬戸内海の道によつて御東遷になつた事實により、瀬戸内海の往來の盛であつたことを確知する以前に於て、既に内海の早くから主要な交通路であつたことを考へさせられるのである。

かく古事記の記事を飫味して見ると、何れも我が郷土を中心としての物語のやうに感ぜられ、従つて我が郷土の地が、我が國にとつて古くから如何に重要地點であつたかを考へずには居られないのである。吾人は更にこの兩交通に對して想像をたくましくすることを許されるならば、この兩交通の本據たる北部は勿論、韓半島との關係を思ひ、南部は黒潮の關係を考へさせられるのである。かゝる考は決して自分だけではない、東京人類學會發行の「日本民族」中、長谷部言人氏著日本人と南洋人身長頭骨形よりの研究(頁一八六)には、最大頭長と最大頭幅との組合せ型について相比研究して、「以上の簡單な所見から聊か大膽ではあるが、日本人と南洋人との間に親近關係のあることは予も之を信じたい、それは日本人の祖先の大なる部分が、渺遠の太古に南洋より渡來せることを想像せんとするのである」と云ふてゐる。又同書に、

「この祖先の中には、現に印度洋諸島に棲息するものと、身性甚だ類似するものもあつたが、寧ろ然らざるもの

が數に於て甚だ勝てゐたと思はれる、後者は前者より長頭に傾き、それだけ亞細亞人を遠ざかるものである。我等は又ニウギニア・メラネジャ人よりも大なる頭を有し、この點に於てアイノと共に幾分ポリネージャ人に近似する、凡そ南洋諸島人は舊大陸より印度洋を経由し、赤道反流に乗じて南洋に到達せる群落に出づること疑なく、その一部が黒潮に身を托して日本島に達したるは甚あり得べきことである、印度洋諸島を東に距ること最遠きポリネージャの住民と、これと北に距る甚遠き日本の北部地方型との間に、幾分の近似を見るは蓋し偶然ではないであらう」と記してゐる。従つてこの縱横兩交通は如何なる意味を寓するものであるかをも想像せしめられるのである。

我が大御祖にまします天照大神は、御宗家の神として高天原にましまし、御弟君素盞鳴尊は北方派の後を繼がせられ、即ち母方の方を御繼ぎになり、出雲との關係を有せられた。肥川上の御傳説の如き之を拜察致す時、思ひ半に過ぐるものがあるのである。従つて素尊の御後が大國主命、少彥名命などとなり、我が郷土附近を御經營になつた、即ち國土開拓を遊ばされたのであると云ふことをも、理解し得られるのであり、此等もこの交通線があつたて力のあつたことを忘れるわけには參らぬのである。吉備の地は素より我が讃岐の如きも出雲系の遺跡が多く認められてゐる、例へば金刀比羅宮の傳によると(香川縣神社誌上卷頁四)、讃岐琴平の地は大國主命が本據として中國・四國・九州を御經營あらせられた所となつて居り、金刀比羅宮は命を御祀り申してあるのである。又小豆郡には尊御來航の傳説があり、同地の牧業は尊に其の端を發してゐると云ひ、又同四海村八坂神社は尊を奉祀し、

又同村の冠者神社は尊御來航の時の謠師を祀つた所と云ひ、又八坂神社は初め尊の御登攀あらせられしと云ふ大丸の地に鎮座ありしを、延暦三年勅命により官牛を長嶋に移し、官牛放牧の遺趾へ遷座したと云ふことになつてゐる（香川縣神社誌上卷頁三）。尙香川縣内鎮座の神社を觀ると其の御祭神に大部分が素尊と大國主神とである（調査）。この他讃岐には陶と云ふ地名があり、古來陶器の産地であつた所で、今も多數の竈址が残つてゐるが如きも、出雲との關係を物語るものと云はれ、我が郷土附近が如何に出雲と關係が深かつたかをも想像し得るのである。

尙神武天皇御東遷の時、吉備の地に比較的永く御駐蹕になつた、古事記には三年御駐蹕とあり、日本書紀には「徙入吉備國、起行宮、以居之、是曰高島宮」、遷上幸而於吉備之高島宮、八年坐」とある、かく意外に永く御滞留になつたのは、或は舟楫を修め、兵食を蓄へ給ひ一舉大和を平定せんとし給ひしなりと申すが（高島村史頁三）又沼田頼輔氏は之を以て恐らくは出雲民族牽制のためであらう（上代の吉備頁三）とされてゐる。又時代は下るが吉備津彥命が吉備に御下りになつたのも、其の理由は出雲民族鎮撫の爲であらう（上代の吉備頁五）と、論ぜられてゐる。尤も吉備津彥命と出雲との御關係は古典には日本武尊の御傳と混ぜられてゐる、即ち吉備津彥命は吉備に御下りになつて後凡五十年を経て、出雲振根を御征しになつたと云ふのであるが、古事記には倭建命が出雲建を御征しになつたことになつてゐる、この兩傳は事蹟が類似して居り、且出雲建と申すのは出雲梟師の義で、出雲の族長であるから、振根を指すものとも考へられるが、今俄に判定することは困難である。（上代の吉備頁六）

兎に角、出雲派の勢力が高梁川の交通線によつて、吉備は素より内海諸島から讃岐方面にまで及んでゐて、當

時の大勢力であつたことが考へられるのである。従て我が郷土附近の地は早く開け、文化の度も早く發達したものと考へられ、自分は我が國發祥の搖籃は確に瀬戸内海、殊に我が郷土附近であつたのではないかと考へるのである。

畏いことではあるが、出雲派の國土經營を完成遊ばされ、愈々國土奉還と相成り、こゝに高天原から宗家の神が御降臨となり、はては神武天皇の御東遷と相成つたので、是誠に二千六百年の記念すべき古であつたのである。而天皇も亦我が郷土の地に於て比較的永く御滯留遊ばしてゐる、古事記には三ヶ年日本書紀には八ヶ年、御駐蹕と傳えてゐる、吉備の高島宮の御遺蹟（高島宮傳説地、岡山縣兒島郡甲浦村と神武天皇聖蹟調査委員會にて決定、昭和十五年八月）は果して何を物語るものであろうか、或は吉備の地は交通路の關係上出雲派の勢力の盛な所であつたから、天皇は先之を牽制する爲に永く御駐蹕になつたのであると云ひ（上代の吉備頁三）或は舟楫を修め、兵食を蓄へ給ひ、一舉大和を平定せんとし給ふた爲であるとも申す（高島村史頁三）が、どちらにせよ、備讃海峡の地は所謂飽島が散在し、早く讃岐海部の根地をなし、世に攄飽海賊と稱せられて「神武天皇御東遷を始め、神功皇后の三韓御征伐、天慶の亂、源平二氏の争亂、吉野朝時代、八幡船、豊臣秀吉の朝鮮征伐、西南役に至るまで、海上に於て活躍をしたことは世の知る所である」（真本信天著海賊史）又吉備の方にも海賊の傳説が残てゐる、即ち吉備津神社の社傳によると、古百濟より溫羅ウラと云ふ者が來て吉備の地方を占領し、今の吉備郡の新山ニヒに城郭を構へ、西國の貢船を掠奪したから、吉備津彦命が御越になつて之を御鎮定になつたと云ふのである（上代の吉備頁五）上代の吉備の著者沼田頼輔氏は之を評して、

「この説たる未、俄に信すべきにあらざるも、思に吉備の沿岸は西國往來の要路に當り、其海岸は港灣出入して、古より屢海賊の占居せる所なれば、濫羅の如きものゝこの地方を占有せりといへる傳説の如きも、直に排斥すべきにあらず。」(上代の吉備 頁五)

と云はれてゐる、事實如何を問はず、要するに備讃海峽の地は早くより海上生活民の根據地で有勢であつたことは事實である、神武天皇の吉備の地に永く御滞留になつた原因も、或はこれがためであつたかも知れないのである、壘飽諸島には現今神武天皇當時に關する傳説は何等存するものがないのであるが、定めし當時に於ては何等かの御奉仕を申したことゝ考へるのである。かく考へて見ると、我が郷土附近の地は、神武天皇の古に於ても尙重要な地點であつたことを想像することが出来るのである。

單に神武天皇の古に於て許りでなく、有史以後の古にあつても、我が郷土附近の地が大和の中央にとつて、餘程密接且重要な役割をつとめた所であることが考へられるのである。此等も古典の明に記す所で、吾人は古事記を拜讀する時、其の意外なのに驚かされるのである、即ち崇神天皇の四道將軍を御遣はしになつた時、吉備津彥命を吉備の地に御遣はしになつたこと、又我が讃岐の地が日本武尊の御傳説を有してゐることなどを考へると、蓋思中半に過ぐるものがあるのである。吉備の地の如き、出雲と中央(大和)との交通上重要地點であり、又中國では珍らしく開けたる農作地である關係上、特に孝靈天皇の皇子で當時有力でゐらせられた吉備津彥命が御出でになつたのであり、其の御子孫が吉備の地にひろがつて、永く大和との密接な關係を有せられたのである、吉備

の中山に嚴然たる命の御墓を拜する時、さては其の山麓に壯嚴なる國幣中社吉備津彦神社を拜する時、轉感慨の情に打たれるのである。

然し吉備津彦命については史の傳ふる所不備で、事實は判明を欠いてゐるのであるが、當時吉備に御下りになつたのは、普通に考へる如く吉備津彦命御一人ではなかつたらしいのである、所謂大吉備津彦命以外に、御弟の稚武吉備津彦命も同時に御下りになつたのである、古事記には

「大吉備津日子命、與若建吉備津日子命、二柱相副而、於針間氷河之前、居忌釜而、針間爲道國^{トシ}以、言向和吉備國也、故此大吉備津日子命者^{吉備上道臣之祖也}次若日子建吉備津日子命者^{吉備下道臣等續祖}」

とあり、又「上代の吉備」には（頁七一八）右を評して、栗田博士説を挙げ、御兄弟にて吉備に言向給ひしは、黒田宮の御宇にて、皇子三、四十歳の頃と、即孝靈の三十八年頃とさしあてゝも二百歳に近かるべし、たとひ當世の人高年なりとも、人々みな然るべきにあらず、されば崇神紀にみゆる吉備津彦は若建吉備津日子命の子なる吉備武彦の事とすべし、二皇子の言向和^{ユキナリ}し給へる時より崇神の御世に至るまで、多年序をへて、國人又命に背し奉りし故に、彼國に因ある吉備武彦命を遣はせしを崇神紀には吉備津彦と記せしものなるべし、と云ふてゐる。要するに吉備は最初大吉備津彦、若建吉備津彦の御兄弟で御鎮定になつたのであるが、後になり又其の必要を生じたので、更に吉備武彦命を御遣はしになつたのであるのを、所謂吉備津彦一人の御事蹟としてしまつたのであるから事實を觀察する場合には此等の點をよく吟味せなければならぬ。

之に反して讃岐の地は、この重要な吉備の對岸の地であるから、吉備津彦命に因で御姉君に當らせられる倭迹々百襲姫命の御領地となつたのである、然し姫命が讃岐に御越しになつたか否かは正史の記す所がないから不明であるが大川郡譽水村（ミヅノ）の大水主神社並に香川郡一宮村の國幣中社田村神社では之を傳へ、兩社共延喜式内社であり、又香川郡佛生山町の村社百相神社も姫命の御來遊を傳へて居り、尙大川郡方面には命の御遺蹟と稱する所が各所に残つてゐる（香川縣神社誌上卷頁四）、此等を見ると、百襲姫命との關係は少くなかつたことが考へられ、吉備の地と並び吉備讃岐を一丸とせる地域の、當時重要地帯であつたことをも察せられるのである。

我が郷土附近の地は單に吉備津彦命の時代許でなく、之より以後久しき間、中央（大和）との間に交渉を保つて重要な地位を持続してゐたことを、忘れてはならない。此等も古典の物語る所で、小豆島に應神天皇の御聖蹟があることなど、あんな小島に、然もあの上代に於て、應神天皇が御越になつた等如何にも不審に感ぜられるのであるが、夫は決して寒霞溪の名勝があつたから御越になつたのではない、古典によると、應神天皇の宮に入つて妃となり寵のあつた兄媛と申す方がおありになつた、蓋兄媛は稚武吉備津彦命の御子吉備武彦命の女にましまし、御父武彦命の如きは吉備津彦命の裔として皇室との關係が深い許でなく、當時勳功の赫々たりし日本武尊の御伴をして東征に従事し勳功をたてられた方である、かく皇室との關係が深かつたので宮仕されたわけである、この兄媛が應神天皇の難波大隅宮に幸せられた時御伴せられ、高臺に上り西方を望み懷郷の情禁じ難く、御許を得て夏四月には難波津を立ち歸省せられることになつたので、天皇は兄媛の爲に、海夫八十人を淡路の御原

(三原)から召し寄せ、水手となし、兄媛を御送りになつたが、其の九月には天皇は特に吉備の地に御幸になつたのである、即ち天皇は九月初淡路島に狩を思つき給ひ、次で小豆島に幸し、やがて吉備に御渡りになり、葉田の葦守宮に御着きになつたのである。小豆島に天皇の聖蹟が残つてゐる、例へば小豆島の五社八幡宮は天皇の御即位の二十二年に淡路島より吉備國に幸し給ひ、更に小豆島に御遊幸遊ばされた、その故を以て御遺跡に奉祀したもの、又香川郡直島村には天皇御即位の二年に御來島になつたとの傳説があり(香川縣神社誌 頁七五)又小豆島淵崎村の寶生院には應神天皇御手植と傳ふる大柏楨がある、今は天然記念物として保存されてゐる。(國寶並に史蹟名勝天然記念物調査報告 頁二五五)

香川)此等は將にこの古を物語るものに外ならないのである。

尙應神天皇の皇子仁德天皇の時にも吉備から宮仕された方がある、吉備海部直の女黑媛と申す方である。(日本書紀大雀命の條) 海部直と申すのは海人を統領せる族長であるから、當時海岸地方に占居してゐた豪族であつたのであり、從て宮仕も出來たと云ふ關係をもつものと考へる、この黑媛も後に歸國された、書紀には當時の模様を次の如く記してゐる。大雀命應天皇看吉備海部直之女黑日賣其容姿端正、喚上而使也、然畏其大后之嫌、逃下本國天皇坐高臺望瞻其黑日賣之船出浮海、以歌曰、游岐幣邇波、袁夫泥都羅罷玖、久漏邪夜能、摩佐豆古和藝毛、玖邇幣玖陀良須云々。大后之を御聞になり大に御忿になつたので、天皇は淡路行に託けて吉備に幸し給ふたと云ふ傳になつてゐる、紀には當時の事實を左の如く記してゐる、

「於是天皇戀其黑日賣、欺大后曰欲見淡路島而、幸行之時、坐淡道島、遙望歌曰、遊志旦流夜、那爾波能佐岐

用、伊傳多知且、知賀久邇美禮婆、阿波志摩、游能基呂志摩、阿遲摩佐能志麻母美由、佐氣都志摩美由、乃自其嶋傳而、幸行吉備國、爾黑日賣令大坐其國之山方地、而獻大御飯、於是爲煮大御羹、採其地之菰菜時、天皇到坐其嬖子之採菰處、歌曰、「夜麻賀多邇、麻祁流阿袁那母、岐備比登登、等母邇斯都米婆、多怒斯久母阿流迦」かくて天皇御還幸の際、黑媛が又歌を御詠み申し御送申してゐる、紀に天皇上幸時、黑日賣獻御歌曰、

「夜麻登幣邇、爾斯布岐阿宜且、玖毛婆那禮會岐袁理登母、和禮和須禮米夜、」

と又

「夜麻登幣邇、由玖波多賀都麻、許母理豆能、志多用波潤都々、由久波多賀都麻、」

と、この事實によつても、上代に於ける吉備の地が中央の大和との往來に於て、如何に頻繁であつたか伺はれる。

かゝる中央との關係は單に吉備許でなく、對岸の讃岐に於ても之を認めることが出来る、讃岐に於て日本武尊の御傳説を有するが如き、決して偶然でないと考へるのである、之を史乘に徴すると、日本武尊の御母は所謂大吉備津彥命の御弟で、大吉備津彥命と共に吉備を御鎮定になつた稚武吉備津彥命（若日子武吉備津日子命）の女で、稻目大郎姫と申し、景行天皇の宮に入り、妃となられた方である、古事記、大帶日子淤斯國和氣天皇の條に、「此天皇、娶吉備臣等之祖、若建吉備津日子之女、名針間之伊那昆能大郎女、生御子、櫛角別王、次大碓命、次小碓命、亦名倭男具那命、次倭根子命、次神櫛王。」

上代に於ける讃備地方の地位

河上而、佩倭建命之詐刀、於是倭建命、誂云伊奢合刀、爾各拔其刀之時、出雲建不得拔詐刀、即倭建命拔其刀而、打殺出雲建。」

この傳説は、吉備津彦命の出雲鎮定と類似して居り論疑のある所であるが、兎に角尊の我が郷土に何等かの關係を有せられたことは、察することが出来る。又古事記には

「倭建命……又娶其入海弟橘比賣命、生御子、若建王^一又娶近淡海之安國造之祖、意富多牟和氣之女、布多遲比

賣、生御子、稻依別王^一、又娶吉備臣建日子之妹大吉備建比賣生御子、建貝兒王^一……建貝兒王者^一讚岐綾君、伊勢之別、廣佐首、

官首之別等之祖」

とあり、この中、弟橘比賣は讃岐の方で、今の大麻神社々司穗積家は其の後であると云はれて居り（香川縣神社誌）又、

大吉備建比賣を入れて妃とせられ、其間に御生れになつた建貝兒王は讃岐の海で惡魚を御退治になつたと傳へら

れて居り（讚留靈手記）、讃岐の綾家は其の裔であると稱せられてゐる。此等の關係によるものか、日本武尊伊勢

に薨去の後白鳥となつて西に御飛びになり、遂には讃岐にまで及んだとの傳説を有し、今の太田郡白鳥町に在

る白鳥神社はかゝる緣故により尊を奉祀した所と稱せられてゐる（香川縣神社誌）尙讃岐の國造として始めて御下りにな

つたのが景行天皇の皇子神櫛王^{カシノミ}であらせられるが、この王が矢張り日本武尊の同腹の御弟に當らせられ、大吉備

津彦命の御弟稚武吉備津彦命の御孫に當らせられるのである（古事記、大帶日子^{オホオビヒコ}、神櫛王は讃岐の牟禮^{ムレ}に御あで

になり、御子孫相繼で讃岐の國造となられ、後には中臣宮所氏を稱して代々山田郡の大領であつた、今の木

土代に於ける讚備地方の地位

田郡前田村の地はこの宮處家の盛えた所であり(宮所本)其の遺蹟も今に残つて居り、(前田村の堂床並に同村平尾に在る群墳等)神櫛王の御墓の如きも牟禮村に御治定になつてゐる、此等の史實を觀ると讃岐の地も亦吉備と共に上代中央(大和)との關係愈々淺からざりしに驚かされるのであり、此等の諸點から推して我が郷土附近の地は、上代に於て中央との關係最深く、從つて重要な土地であつたと想像するのである。

而この關係は單に當時に於てのみではなく、尙後世に至るまでこの重大性を持續してゐたことを忘れることが出来ないのである、應神天皇の吉備に幸せられた時の狀況を觀るに、吉備氏では兄媛の御兄、御友別が一族を集めて膳夫となし、大に天皇を饗し奉つた、「上代の吉備」には當時の有様を想像して、

「兄媛の兄の御友別は一族を呼び集へて膳夫となし、山海の珍味を盡して天皇を饗し奉つた、頃しも秋の末なれば、四方の山邊は見渡す限り紅葉して錦を飾り、謂はゆる二月の花にも勝り、その眺め又一入なりしなるべく、天皇御感に入りけむ、やがて吉備國を分ちて厚く吉備氏一族に宛行れ玉へり、」

と記してゐる、事實吉備家は之より大に繁盛したもので、御友別命の長子稻速別は川島郡に、次子仲彦は上道縣に、三子弟彦は三野縣に、又御友別の兄浦凝別ウラニガハレは苑縣に、又御友別の弟鴨別は伯區勢縣に封ぜられ、兄媛には織部郡を賜つた、稻速別の後は下道臣の祖となり、仲彦の後は上道臣、香屋臣の祖となり、弟彦は三野臣の祖、浦凝別は苑臣、苑直ツノ、アケヒ（苑は一に蘭）の祖、鴨別は笠臣、笠朝臣の祖となり、一門相繼で大和朝廷に奉仕、大に貢獻する所があつたのである、奈良時代の始め和歌で知られてゐる笠朝臣金村はこの鴨別の後であり、香屋臣の香

屋は蚊屋或は賀陽と書き、子孫繁衍し、天平神護元年に其の氏上に賀陽朝臣の姓を賜つたのは仲彦の後であり、
 夫の有名な吉備眞備の如きも稻速別の後である。吉備眞備の一人だけ觀ても吉備家一門の太和との關係が如何に
 深く、又如何に我が國文化上に貢獻したか考へられるのである。尙兄媛に賜つた織部縣（ヘリ）は備前、備中、備後の
 各地にあり何れが夫であるか不明であるが、矢張り賀陽郡の服部郷が夫で今日吉備郡にある服部村が之に當るも
 のであろうと云はれてゐる（上代の吉備頁一七）。應神天皇の末年に「百濟國主照古王、以牡馬壹疋牝馬壹疋、付阿知吉師以
 貢上、亦貢上横刀及大鏡、又科賜百濟國、若有賢人者貢上、故受命以貢上人名和邇吉師、即論語十卷、千字文一卷
 併十一卷、付是人即貢進、云々」（古事記）とあり、史上に有名な話であるが、この阿知使が率ひて來た蚊屋衣縫（カシキヌヌイ）
 （加夜衣縫）が服部郷にゐたと稱せられ、（上代の吉備頁三九）又應神天皇の吉備に御幸の時御駐輦になつたのが葉田と申す
 所であり、この葉田は秦、波多、幡多と同一の語原の字で、織縫を業とした部民の居住地であつたことが察せられ
 又都窪、淺口の兩郡には往時阿智郷があり、又倉敷町には阿知町があり、こゝに阿智神社と申すのがあり、又邑久
 郡にも阿知と云ふ所があり、こゝに近く國幣中社の安仁神社があり、阿知使主を祀つてであると申す（上代の吉備頁一七）か
 く阿知使に因める土地が多くあるのを觀ると、阿知使とは關係の餘程深い所であることが考へられ、而阿知使は
 我が國に支那文化を傳へた最初の如く考へられてゐる人であり、この阿知使の關係者が應神天皇と關係の深い吉
 備の地に繁殖したのも亦偶然でない感に打たれ、従つて當時この地方の我が國文化發達上に及した影響も決して
 少くなかつたこと考へられる。

尙この他に、吉備地方と大和との關係を物語る史實は枚舉に遑がない、中には古來の折角の立派な史實を汚すが如き事實もあつたことは、當地方の爲如何にも遺憾とする所であるが、又夫の弓削道鏡の非望を排除して大功のあつた和氣清麿も亦この地方の出であることを思へば、この地方の上代に於ける重要性を一層感ぜさせられるのである。

一體和氣氏の起については、「上代の吉備」の傳ふる所によると、神功皇后の三韓御討征に凱旋し給ふや、忍熊別命が明石の堺で兵を備へ、皇軍に叛した、皇后即ち吉備氏の弟彥命を遣はして、針間（播磨）と吉備の堺に關を設けて、これを防がしめになつた、この關を和氣關と申す、今日の三石の地が其の遺跡である、命は此功によつて吉備の磐梨縣を賜はつた、其の子孫が繁衍して、備前、美作に擴がり、輔治野（藤生）石生、和氣の諸氏が出來たのである、備前、美作兩國の國造に和氣氏の人が任ぜられてゐるものもあるから、この族は吉備氏と共に當時朝廷の御信任を得てゐたものと考へることが出來、和氣清麿の忠誠の如き、中央にも他には多かつたに相違ないにも係らず、態々吉備の和氣氏がこの大任にあづかつたと云ふことは、餘程の原因のあつたことと考へられ、決して偶然でないと思ふのである。されば吾人は當時の吉備地方と大和との關係を示す幾多の史實中、吉備眞備並に和氣清麿の二人の史實だけで以て、この地方の當時我が國にとつて如何に重大な地位にあつたかを察し之を信じたいと思ふものである。これと共に對岸に當る我が讃岐も同様の關係を有して、四道將軍として吉備津彥命の御下りになつて以來は、讃岐は素より其の治下にあつたものと考へられ（仲多度郡、吉備津彥命の時代には讃岐は命の史頁一二）

御姉に當らせられる倭迹々百襲姫命の御領地となり、下て吉備一門の繁盛した頃には之と御姻戚の關係を有せらるゝ日本武尊との關係を生じ、史實は明を缺く所は少くないのであるが、日本武尊の御子建貝兒王(タケカヒ)（武彥王）は讃岐に御下りになり、讃岐附近の惡魚即ち壠飽邊に根據を置いてゐた海賊を御鎮定になつたと云ひ（讃留靈記）、此の王は俗に讃留靈王と申し、西讃の豪族であつた綾家が王から出たと傳へられて居り、又日本武尊の御弟の神櫛王が讃岐に封ぜられ給ひ、御子孫相繼いで讃岐の國造をつとめられたと云ひ、後には日本武尊の御子建貝兒命（武彥王）も綾郡に封ぜられ、縣主の職に任ぜられ給ふたと傳へてゐる、古い時代のことであるから傳説は色々になつてゐるけれども、要するに吉備の地も其の對岸の讃岐の地も、即ち備讃瀬戸をへだてゝ其の兩岸の地には、吉備氏の一族並に其の縁者の本據となつた所で、然も吉備津彥命と云ひ、日本武尊と云ひ、當代に於ける皇族として最有力な方であることを思ふと、我が郷土附近の地は吉備讃岐を通じて、當時の我が國にとつて最重要な地位を保つた所と申すことが出来るのである。

應神天皇の御代は百濟から文學を御傳へ申したことは有名な事實であるが、之を傳へた阿知使主が吉備の地に關係をもつてゐたことは既に申した通りであるから、當時の吉備地方は又我が國中でも文化の最初に高まつた所と見ることが出来、奈良時代になつて文學が隆盛を極めた時代にも吉備の地は其の中心であつたとも考へられ、吉備眞備の如き學者を出し、海外にも留學するの名譽を擔なつたのである。これと同様又讃岐の地も、其の影響を受けて學問の發達を見たこと考へることが出来、現に讃岐には當時代から却々の學者が輩出してゐる、殊に法學

に關する博士が多く出たのである。

尙佛教が傳來するに及んでは佛教も亦此等地方には盛に行はれた、殊に讃岐の如きは隆盛で、恰も吉備地方に於ける吉備眞備の如く、支那に留學した一代の學者にして宗教家たる弘法大師を出し、從來の宗教は日本的宗教に化せられ、爾來佛教の隆盛と共に讃岐よりは五大師を出し、他に比類なき貢獻をいたしたことは世のよく知る所である。

かく吉備、讃岐兩地方を一丸として考へる時、この地方は我が國開闢の古より奈良、平安の始めにわたる上代に於て、如何に重要な地點であつたかが想像されるのである。

然るに不思議にも中興この地位は忘れられ、吾人の如きこの地に居住しながらも尙これが認識を缺き、中央を遠ざかつた一寒村、經濟的に觀察しても阪神の一後背地位にしか考へないやうになつたのは何が爲であらうか、申すまでもなく、交通路の變化に歸因するもので、時代の進運と共に高梁川を媒介とする南北線の往來の要が減少し、瀬戸内海が交通の本幹となるに及んだ爲であり、文化の中心が漸次東に移るに従ひ、一層に其の重要性が忘却さるゝに至つたのである。然し二千六百年の記念すべき年に當り、特に新體制の採用されんとする時に當つて、吾人は我が郷土の本來性を思ひ出して、所謂溫故知新以て新體制に従ひ、我が祖先の精心を忘れることなく、至誠奉公、大政翼賛の實を擧ぐるやう努力しなければならぬと思ふので、再古典を検討して、我が郷土の地位を考究した次第である、若し一人にても我が郷土の本來性を認識して下さるを得ば無上の光榮である。